

<b>Title</b>	イアゴウ論
<b>Author</b>	辻, 圭一郎
<b>Citation</b>	人文研究. 6 卷 7 号, p.500-515.
<b>Issue Date</b>	1955
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# イ ア ゴ ウ 論

辻 圭 一郎

オセロウの敗北は単に善人が敗北しただけではなく、徳そのものの避け得られない敗北である。「オセロウ」は善と悪との決闘であつて、悪の代表者としては、シェイクスピアは、彼の初期の作品の中にかつて登場させたことのある一つの型の人物を復活させている。マールウの「モウルタのユダヤ人」に登場する、物欲の権化、復讐の鬼の如きユダヤ人の金貸業者バラバスに模して、不完全ながらも「タイタス・アンドロニカス」の黒人アーン、「リチャード三世の悲劇」のせむしのリチャードを創造した。今度も同様にこのバラバスを手本としているが、アーンやリチャード王よりは一層明確な哲学的目的をもち、はるかに巧妙な描写でイアゴウを創造した。イアゴウは悪の象徴として、マキアベリ主義を奉じた恐ろしい人間として登場する。彼はルネッサンス後期の傭兵で、ヴェニス生れである(III.iii.201. V. i. 89. ff.)。① シハイクスピアは彼にスペイン系の人間らしい名前を与えているのは理由があつてのことで、イアゴウは、ルネッサンス時代のスペイン人、イタリア人に普通の叛逆心、残忍性をもつてゐることを観客に印象づけようとしてゐるのである。彼はいかにも軍人らしく、武骨、無遠慮で、礼儀作法には無頓着で、下品ではあるがヒューマリーがあり、皮肉屋でもあるが、「損得を区別出来るようになつて以来まだ自分を可愛がる奴にお目にかかつたことがない」(I. iii. 314-7)と云つてゐるごとく、彼は本来徹底的な利己主義を信条とする冷酷極まる人間で、超人的な知力、洞察力、意志力をもち、予期しない難局を処理する機敏さ、冷静さ、融通性があり、あらゆる手段を講じて極悪非道の目的の実現に向つて進んでゆくのである。彼は劇中のすべての人物をあたかも人形のように操り、彼らを破滅させるために、複雑極まる陰謀が要求するままに



彼らを自由に利用して、この劇を悲劇に終らせている。本質的に残酷な点では、彼は人間の姿こそしているが、その行う処を見れば悪の化身であり、悪魔そのものであると云つてもよ。彼の陰謀の全貌がわかり、迷いから目覚めたオセロウは

I look down towards his feet but that's a fable. (V. ii. 285)

(足を見ても、悪魔は爪が割れているというのは作り話だ)。

と述懐してゐる。イアゴウ自身も、自分の本性をはつきり自覚してゐる。

### Divinity of hell!

悪魔の哲理だ!

When devils will the blackest sins put on,

極悪の罪を人間に行わせようとするとき、

They do suggest at first with heavenly shows,

おれが今やつているように、

As I do now. (II. iii 359—62)

悪魔は先ず天使の姿を借りて誘惑するのだ。

彼は観客に心の秘密を知らせる目的で独白したり、ロダリーゴウに打明けたりにしているが、その独白や、ロダリーゴウとの会話によつて、彼は將に陥し入れようとしている相手の長所——それはとりもなおさず彼から見れば弱点となるのであるが——を極めて明確に察知していることが覗かれる。即ち単純で真正直なオセロウが彼を信頼しきつてゐるのをよいてに (II. iii. 366)、やさしい寛大なデズディモウナの貞淑を愛じて毒となし (II. iii. 369)、陰謀のわなを張り巡らして彼らを破滅に導くのである。しかもこのメフィストフェレスのような悪党は、いつも微笑をたたえ、公平にして従順な部下、同情深い友人としての態度を失わない。だから彼の悪行の真最中でも、オセロウは彼を信頼して、

This fellow's of exceeding honesty,

こいつは非常に誠実な男だ、

And knows all qualities, with a learned spirit,

それに世馴れておつて、

Of human dealings. (III. iii. 258—60)

世態人情を知り尽している。

と賞め讃えている。キャシオウの失策に同情してその復讐運動をデズディモウナに頼んでやろうという時の彼は (II. iii.



320 ff.) 万人の眼には親切で純真な人間とさえ見える。だからデズディモウナも、苦しむことが起つた時にはまず彼を呼びにやる (IV. ii. 104)。また彼を最も知つてゐる筈の妻イミリアさえも、人のことでも自分のことのように心配する夫だと思ひこんでおり (III. iii. 3-4)、彼が悪党だとはゆめにも考えたことがない。最後に彼の罪をはつきり知らされた時に、三度までも「私の夫が！」と驚愕の叫び声を揚げる位である (V. ii. 138. 145. 147)。その上作中の大抵の人物は彼を “honest Iago” と呼んでゐる。<sup>④</sup> しかもこの “honest” とする語は十数回も用ゐられてゐるのである。善人たちがこの悪人に対して “honest” とする形容詞で呼んでゐるとする事實は、いかに善人たちは、永遠の闘争に於て、無防備状態であるかを示してゐる。実にオセロウを欺くことの出来るのはこの “honest Iago” だけである。彼がかくも完全に偽善の仮面を被りおおせたのは、一つには彼は素晴らしい自制心の持主であり、一つには彼はリチャードのように強烈な感情や情熱の人間ではなく、極めて冷淡な気質の人間だったので、その心の中に抑制しなければならぬような猛烈な感情は起らなかつたのである。その上彼はこれまで表面は慎み深い生活を送り、危険な罪を犯して地位や昇進を危くするような誘惑に出会わず、相当の人望を博してきたらしい。ブラッドリーも “So that, in fact, the tragedy of Othello is in a sense his tragedy too. It shows us not a violent man, like Richard, who spends his life in murder, but a thoroughly bad, cold man, who is at last tempted to let loose the forces within him, and is at once destroyed.”<sup>⑤</sup>

(それ故、實際、「オセロウ」の悲劇はある意味で彼の悲劇でもある。それが我々に示してゐるのは、一生を殺人で送つたりチャードのような兇暴な人間の姿ではなくて、徹底的に冷酷な人間が誘惑されて内部の力を抑えきれず解き放つて、直ちに破滅してしまふ姿である。) と評してゐる。

イアゴウの性格でまず最初に気付くことは、彼の素晴らしい知性である。それに加ふるに非常な狡猾さ、豊かな想像力、残酷と忘恩に支配されてゐる自負心。実に恐しい、危険な組合せだ。このような人物を敵としては防禦の術もない。もし



仮にイアゴウがゴネリルと結婚したとしたならば、その結果は思つただけでも身震いする。彼は平民の出で、たいした教育を受けていない。したがつて彼の知性はいわば天性で、修練の結果得たものではない。一つは嫉妬心から、一つは自分の知性に対する自覚から、生れつきの知性を教養ある上品さ以上に評価したいという気持を常に抱いておつた。力と優越の自信を最大限にまで満足させることが彼にとつては最も愉快なことだつた。したがつて彼は自負心や自尊心の障りとなるものに対しては非常に敏感である。自分を高く評価し、他人を軽べつし、自分の優越感を乱すか傷つけるものは何であらうと我慢出来ない。キャシオウの任用は彼を憤慨させ、キャシオウの学識に反感を抱くのもこのためであり、イミリアに嫉妬するのもこの理由からである。彼は妻を好いていのではないが、他人に妻を横取りされ、不幸な夫として気の毒がられたり、嘲笑されたりしないかという心配が、彼にとつては甚だしい屈辱である。そして貞淑な女などというものは存在しないと確信しているから、この心配が常に彼につきまといつてゐる。又彼は男の善良さに対して悪意を持つてゐるのも大体これと同じ理由によつてである。彼が善良さに対して悪意を持つてゐるのは、悪のために悪を愛するからではなくて、その善良さは彼の知性には愚鈍に見えるからであり、またそれが彼の自己満足を弱め、利己主義は正當妥當なものだとする彼の信念をかき乱すからである。キャシオウやオセロウよりもはるかに有能な彼が大して出世しないのは何故か。彼より見れば愚鈍な人間が、「幾分でも性根のある者」(I. i. 54)より出世してゐる。彼は特別に出世したいとは思つていないが、このことは彼の自尊心を傷つける。それ故に善良さは彼を悩ますのである。彼はいつもそれを嘲笑しようとして待ち受け、打撃を与えたいと考へてゐる。

イアゴウはロドリゴウに向つて、また独白に於ても、オセロウを憎んでゐると一度ならず告白してゐる (I. i. 155, I. iii. 373, I. iii. 392)。その理由は、オセロウはキャシオウを副官にしたこと (I. i. 27)、またオセロウはイミリアと関係があると邪推し、その噂を聞いた (I. iii. 393 ff. II. i. 307-8) ことである。次にイアゴウはキャシオウを憎んでゐるとは一度も言つていないが、キャシオウは彼よりも引き立てられたこと (I. i. 32) 彼もまたイミリアと関係



があるに疑つてゐること（II. i. 319）、最後にキャシオウの立派な人物が彼を醜くさせてゐる（V. i. 19—20）ことなどのために、キャシオウに対して反感を抱いてゐる。これらの不満に加えて、彼はキャシオウの地位をねらつてゐる。他の誰よりも知性において勝れてゐると自覚してゐる彼が、憎んでゐるオセロウから、嫉妬してゐるキャシオウから、卑い身分であり、教養がないという理由で見下げられやしないかと常に心配してゐる。現に、第二幕第三場の酒宴の場面で、キャシオウより「副官は旗手より先に救われることになつてゐる」と、侮辱的な言葉を聞かされる。確かに度々聞いたに相違ないこのような言葉は、彼の自尊心を傷つけ、心をひねくれさせるのにあつたと思われる。

彼は永らく正直者と思われてきたし、これまで生れながらの才能のお陰で昇進もしてきたが、今となつて昇進の見込みがなくなつた。それというのも卑い身分に生れ、教育を受けていないがためだと考へる。しかし最早教育を受ける時期を失してゐる。そのうえ、デズディモウナの腰元と結婚し、貧しい生活を送つてゐる。このような事情にある彼は、オセロウやキャシオウを失脚させるために、まず、金はあるが愚鈍で怠惰で、デズディモウナに夢中になつてゐるロダリーゴウ、彼が軽べつしきつてゐるロダリーゴウに目をつけるのである。

イアゴウとロダリーゴウの交渉は財布から始まる。ロダリーゴウはイアゴウの才能と奉仕を金銭で買つてゐるのだと考へ、イアゴウの方もわざと相手にそう考へさせようと意図してゐる。一方は才能を買収するだけの金銭を持つてゐることを誇りとし、他方は金銭を手に入れるだけの機智を誇つてゐる。金銭を愛する気持よりははるかに強く知的優越感を誇つてゐるイアゴウは、自分の知力で相手を口車に乗せ欺くことを、金銭を楽しむ以上に楽しんでゐる。この悪党は間抜けのロダリーゴウに対しては完全に有利な立場に立つて、デズディモウナによつて情熱の炎をかき立てられてゐる彼を操縦すちようどびんのせん抜きがコルクの中に食い込んでゆくように彼に食い入り、自分の目的に向つて意のままに彼を操縦する。デズディモウナはオセロウとの結婚を許可される筈がないから、彼女の父に懇願すれば彼女との結婚も不可能ではなからうと樂觀してゐたロダリーゴウは、彼女が父の反対を押し切つてオセロウと結婚したことを知り、絶望の余り自殺し



た方がましだとさえ考へる。この好機を逸するイアゴウではない。女性の貞淑を信ずる気持こそ、不道徳な情熱を抑制する最大のものと確信し、従つて貞淑なんかそ食えぐらいに思つてゐるイアゴウは、ロダリーゴウに女の移り氣を説き聞かせる。金錢の力を称えては彼の誇りにへつらい、女性の脆さを力説しては彼の情熱を燃え立たせ、素晴らしい弁舌と手際よさで、この憐れな男の抵抗力を完全に圧倒してしまふ。相手は余りにも鈍い知性の持主なので、議論を続けても無益だとわかると「財布に金を入れるのだ」と繰り返して強調するだけで (I. iii. 338 ff.)、相手に防禦力を失わしめる。イアゴウはロダリーゴウを知り尽してゐるのである。彼は勝利を博して悪魔のような自己満足感を味わい、犠牲者を嘲笑すると同時に、このような馬鹿者を相手に時間を浪費しなければならぬ自分を情けなく思う。

Thus do I ever make my fool my purse;

(このようにいつも馬鹿者がおれの財布になるんだ、)

For I mine own gain'd knowledge should profane,

もしもあんな抜作相手に時間を浪費するのなら、

If I would time expend with such a snipe

愚んで、利益を得なければ、

But for my sport and profit. (I. iii. 389—92)

おれの鍛えた智慧を汚すものだ。)

ロダリーゴウは悪徳で満たされてゐないとしても、少くとも善人ではなかつたので、イアゴウはその面に働きかけさせずればよいが、オセロウを陥し入れようとすれば、彼の美德に直接挑戦し、彼の廉恥心と誠実さを悪用する以外に方法がない。オセロウに対しては、怒りを招くような不道徳なことは出来ない。イアゴウは非常に注意深く術策を弄するのであるが、自分は善良な、良心的な人間だと露骨に誇つて、オセロウに偽善者だと疑われるようなことはせず、例えば「自分のためだとわかつていても不正なことは出来ない」(I. ii. 3—4) という風に控へ目に自分を弁護して、相手の信頼を得るような方法をとる。また人を非難する場合、自分の言葉を信用させるためにまず自分を非難してかかり、自分の判断は誤つてゐるかも知れないと前置きする。



I confess, it is my nature's plague

To spy into abuses, and oft my jealousy

Shapes faults that are not. (III. iii. 146-8)

(本当のことを申し上げますと、人の過失を探ることは自分の悪い癖で、嫉妬心からありもしない過失を作り上げることがよくあります。)

これは勿論正反対の印象を相手に与えようとの考えで言われた言葉である。自分の悪徳を述べることによつて、自分は悪徳がないとの印象を与えようとするのである。自分は誤を犯さないように努力してはいるが、ひよつとしたら誤つてゐるかも知れないと前置きすれば、いかにもその人の意見は正しいと思われのが普通である。

デズディモウナがオセロウにキャシオウの赦免を懇願した直後に、イアゴウとオセロウが応対する第三幕第三場では、イアゴウはデズディモウナについて恐ろしい秘密を握つてゐるが、この秘密を語る勇氣がない、けれどもどうしても語らないではおれないので苦しんでゐるといふようなふりをして、口ごもりながら意味ありげな言葉を漏らし、オセロウの好氣心をいやがうえにも刺戟して、どうしても聞き糺さねばおれないように仕向ける。イアゴウが意見を述べることを拒むことによつて、益々相手をじらす。問い詰められた揚句、語らない理由を述べると、かえつてオセロウは、どんな恐ろしい真実が彼の口をかくも固く閉じてゐるのか知りたいといふ強い欲求に駆られるのである。イアゴウの目的は、オセロウを欺くだけではなくて、欺いた返礼として、彼に感謝の言葉を言わせることにある。

I'll have our Michael Cassio on the hip;

(マイケル・キャシオウに腰投げを食わせてやり、

Abuse him to the Moor in the rank garb,

散々ムーアにざん言してやろう。

... ..

... ..

Make the Moor thank me, love me, and reward me,

ムーアを大馬鹿者にし、氣違ひになる程、彼の平和と安静を

For making him egregiously an ass

かき乱して、



And practising upon his peace and quiet

そのおれにおれに感謝させ、おれを愛させ、おれに報酬を与

Even to madness. (II. i. 317—23)

えよせるのだ。)

これが彼の本質的な悪意であつて、相手の苦しむのを小気味よさそうに眺めて楽しんでるのである。<sup>⑥</sup>

精神的に健全な人間は、外部からの印象や刺戟を受け易いものである。従つて社会的、道德的、宗教的感情に支配され勝ちである。しかしイアゴウはこのような外部からの印象や刺戟を繪て軽べつしている。彼の信条によれば外部からの刺戟に屈することは、意志の薄弱さと、恥ずべき知力の不足を証明していることになる。恋愛、名譽、尊敬、誠実、忠誠といったようなものは、この自由な精神の持主によると「とりのぼせて、だらけた根性のさせるわざに過ぎない」(I. iii. 329—40) であり、彼はそういうものは繪て嘲笑してゐる。彼は「口を開けば必ず悪口を言う」(II. i. 119) 人間であつて、彼の心は全く無感覚で、何一つ受け入れず、何ものにも屈しない。第二幕第二場のデズディモウナと彼との会話にこの気持ちがよく現われている。彼は得意の痛烈な皮肉を浴せて、次から次へと機智豊かに女性の悪口を言う。彼にとつてはいかなる美人も「馬鹿な子供に乳を飲ませ、小づかい帳をつけるくらいがせきの山」(II. i. 160) であつて、女性に対して少しも情熱を燃え立たせることがない。キャシオウがイアゴウに欺かれて酔払いの騒ぎに巻き込まれ謹責処分を受ける直前、デズディモウナによつて、イアゴウがキャシオウと交わす会話にも同じような機智がうかがわれる。<sup>⑩</sup>それが冷い理智的な官能主義者としての彼の姿だ。善いものはいかなるものにも無感覚で、全く意に留めないが、悪用出来るものはいかなるものにも極めて敏感だ。彼の心はまるでふるいのような働きをして、女性をこしてあとに残つたかすを示し、これこそ女性の成分だと喜んでゐる。キャシオウは繊細な、敬虔な心の持主なので、この悪党の冷酷な、冒とく的な軽率さを我慢してゐる。彼はキャシオウに酒を飲んで陽気に騒ごうと誘う。彼は気分の一化した人間でないから、計画の実行に當つては、<sup>⑨</sup>ことも簡単に、即座に、どんな風にも気分の変換の出来る男である。キャシオウを破滅へと誘いながらも

And let me the canakin clink, clink;

(盃を鳴らそう、カチン、カチン。)

And let me the canakin clink. (II. iii. 72—3)

盃を鳴らそう、カチン。)



と陽気に歌い、酒飲み仲間とともに騒ぐことも出来る男である。

前にも述べたごとく、イアゴウは、オセロウに対しては、表面ば親しげに真情あふれているように見せかけ、その実彼の心を搔きむしるような言葉を口にしてひそかに喜びを感じているのであるが、キャシオウが失脚して悩んでいる時に、彼に話しかける言葉にも同様な悪意が感得される。彼はキャシオウの心を刺す最も適切な方法として、名譽なんでものはくだらん、いんちきな、うわべだけのものだと言う。表面は相手を慰めているようだが、実はその言葉の中に鋭い皮肉を含めているのである。己れを責め、後悔しているキャシオウを説き伏せて、デズディモウナに頼んで、オセロウとの仲を取りなしてもらうようにすすめる。誠意のあるように見せておいて、デズディモウナの貞淑を変じて毒となし、親切をそのまま網に仕組んで、皆を一網打尽にする魂胆である。

So will I turn her virtue into pitch,

(そういうふうにしておれは彼女の貞淑を毒にかえ、

And out of her own goodness make the net

彼女の親切で網を作り、

That shall enmesh them all. (II. iii. 369—72)

それでみんなを一網打尽にするのだ。)

イアゴウは二十八才で (I. iii. 313—4) ハムレットとほぼ同年である。ややもすれば彼はもつと年長のように思われがちであるが、シェイクスピアは彼を青年にしているのは理由があつてのことである。彼は青年だと言うことは、彼の悪心は生れつきのものであつて、修練を積んだ結果悪心を抱くようになつたのではないことを暗示している。彼が「悪魔の哲理」に通じているのは天才の然らしめたところである。また彼が人に信頼されている理由の説明にもなる。若い者は、悪意のある術策に長じているとか、世間でもまれてきたためにひねくれ者になつていのだとは誰も考えない。人を引きつける魅力のある話し振りや、機智のために、勝れた資質を持つているとの信用を博し、誠実な人間だと思われていたのである。

知力はいアゴウ独得のもので、彼の性格に生気を与えている。ハズリットは



“He is an amateur of tragedy in real life; and instead of employing his invention on imaginary characters, or long-forgotten incidents, he takes the bolder and more dangerous course of getting up his plot at home, casts the principal parts among his nearest friends and connections, and rehearses it in down right earnest, with steady nerves and unabated resolution.”<sup>⑩</sup>

(彼は実生活において悲劇をやる人であつて、想像の人物や昔の事件をもとにして創作するかわりに、彼はもつと大胆な危険な進路をとつて、わが家を筋にして、主役を親友や縁者に割り当て、全く真面目に、表えることのない元気で、確固たる決心でそれを演ずるのである。)

と言つている。我々を魅するのは所謂その筋書だけではなくて、その筋書が出来上る源、すなわちイアゴウの頭脳である。知力は彼に道徳を無視させ、知力それ自体が捷となつてゐる。あることを為し得るといふ單なる事実が、それを為すための十分な理由となつてゐる。

こうなれば、なんら他に目的がなくとも、単に行動のために行動するようになり、冷酷な知的欲求を満足させるために、不正に飢え、狂信的に悪を行うこととなる。彼の情熱は知力と意志力に集中される。従つて彼は色欲にふけるということがない。彼の欲望は悪魔の欲望であつて、色欲を軽べつしている。彼はデズディモウナを愛してはいるが「全くの色気からばかりではない」(H. i. 304)と言つてゐる。この言葉はスウィンバーンも指摘していることく、<sup>⑪</sup>ほとんど不可解といつてもよい程の彼の性格を形造つてゐる、最も不思議な微妙な点である。ロドリゴウが、デズディモウナに対する恋の苦しみを訴えたとき、彼は「とりのぼせてだらけた根性のさせるわざに過ぎないのだ。さ、しつかりしろよ」(I. iii. 339-40)とか、「おれなら、あま、ちよにほれて、そのために身投げするなどと言うよりは、いつそ人間をやめてひひにで



もなつてしまつた方がましたよ」(I. iii. 316-8)と答えている。

イアゴウにとつては、積極的に義務を無視することは遊戯のようなものである。彼は義務に面と向つてつばを吐き、踏みこづつて進む。あることを行つてはならぬということは、それを行う特別な動機となり、悪事を行えば行う程彼の自由と力を示すことになる。それ故に、彼は独白で、デズディモウナを愛していると述べ、最初は彼女に対するいかなる不法な情欲も否認しておきながら、挿入句的に「恐らくそのくらの罪は無いとは言わないが」(II. i. 304-5)とつけ加えている。この言葉から見ると、彼は罪を犯そうが犯そまいが、責任など気にも留めていないらしい。プースは舞台でこの台詞を述べる際に、勇敢に神に挑戦しているイアゴウを表現しようとして、目の上に投げかけ、反抗的な微笑をたたえて、天をまともにはらみつけたと言われている。<sup>(1)</sup>

外面の見せかけと内心の相違という点からイアゴウを検討することは、彼の性格を理解する一つの鍵ともなる。イアゴウは嘘をつくことが非常に巧みだ。眞実を愛する程度は必ずしも知性に比例するものではない。彼は自分の知力を發揮させ、活動させることを熱望しているから、嘘をつくことに無上の喜びを感じるのである。自分の虚言を眞実と見せかけ、他人の眞実を虚言にしようことに満足しているらしい。美徳を美徳として悪徳を悪徳として通用させることは彼にとつてなんら勝利ではなく、美徳を悪徳に、悪徳を美徳にかえてこそ彼は凱歌を奏するのである。ロドリゴウを利用しておきながらつわばは尽力してやつているようにみせかける。オセロウを欺くだけでなくかえつてそのために相手をして彼に感謝させようとするのである。オセロウに、デズディモウナの行為を正反對の行為と思わせ、天使のような彼女を悪魔のような女だと思わせ、遂には彼の理性をも狂わせ、自分の欲するままに彼を操縦して楽しんでゐる。こうすることがこの悪党の目的であり知力の勝利となる。最も刺戟的な行動を求めて止まないイアゴウは罪の危険に魅力を感じるのである。平坦な眞実の道を進むことは彼にはすこしの刺戟も与えず、夢中にならせることがない。複雑な、危険な陰謀の道を進むことが、深淵の上に張り渡された綱の上を、身体の平均をとりながら進むでいくことが、彼を喜ばせるのである。危険は彼を機敏にし、



成功は彼が敏捷なことを実証する。たとえ彼が後悔するようなことがあつても、その結果は益々彼を罪の深みに追いやるに過ぎない。死物狂いの賭博者が、負けた無念を晴そうとして、益々大きな賭博の興奮の中に入り込むようなものである。みせかけと本心と全く矛盾しているということはイアゴウの性格の一部として重要であるのみならず、それは、この劇全体に浸透している。オセロウは、外観を見て判断を誤つたところに彼の悲劇の本質がある。彼はイアゴウは正直な人間で、デズディモウナは不貞の女だと思ひ込み、彼女を殺害することは正当な行為であると考へていた。眞実を知らされた彼は、「おお馬鹿だつた、馬鹿だつた、馬鹿だつたー」(V. ii. 322)と自らを呪う。オセロウの自殺は当然避け得られない。彼が己が繪てを与えたデズディモウナは、外観は、彼を裏切つてるように思われた。正義の使者として彼は彼女を絞殺するのである。だが彼女の不貞は外観だけだつた。悪は他にあつたのだ。正直者だと思われていた“demi-devil” (V. ii. 300)のイアゴウにあつたのである。

一体イアゴウはいかなる動機から悪事を行うのであろうか。一見動機らしいものを捜してみれば、(一)キャシオウ任命に對する憤慨 (I. i.)。(二)オセロウに對する憎悪 (I. i. iii.)。(三)キャシオウの地位を得たいという望み (I. iii.)。(四)キャシオウがイミリアと密通したという疑念 (II. i.)。などが挙げられるが、果してこれが眞実の動機だろうか。もしこれが動機だとすれば、イアゴウは種々の情熱、即ち野心の情熱、憎悪の情熱によつて動かされていることになる。情熱のない野心や憎悪は、確かにあのように明敏で、これまであれ程用心深い男を駆つて、危険極まる計画を實行させることは出来ないはずである。しかるにイアゴウには何ら情熱らしきものが見られない。彼は普通人以下の情熱しか持ち合せていない。ただ情熱的憎悪でなくとも憎悪の名に値するものを持つているとすれば、「オセロウが憎い」という言葉だけである。だがイアゴウは大の嘘つきだ。彼の言葉はそのまま信用出来ない。イアゴウは、オセロウがイミリアと密通したと疑い、妻と妻とを取り換えなければ腹の虫が納まらないという。この疑惑は何ら根拠がない。オセロウのイミリアに對する言動を見てもそのようなことは信じられない。イアゴウ自身もそれを信じていない、というよりはむしろそれが事實で



あろうがなからうが気にかけていない。彼にとつては明らかにそれは陰謀の動機というよりは機会である。

I know not if 't be true,

(それは本当かどうか知らないが、

But I, for mere suspicion in that kind,

おれはそんな疑をもつただけで

Will do as if for surety. (I. iii. 393-6)

確実なこととして仕返ししてやるんだ。)

確かに彼は十分の動機を挙げてゐる。ただ動機の数が多過ぎる。その上これらの動機が現われたり消えたりする仕方が普通ではない。キャシオウの任命に対する憤慨は、ロダリーゴウとの最初の会話で述べられるが、それ以後は一度も述べられない。オセロウに対する憎悪は第一幕で述べられているだけである。キャシオウの地位を得たいという希望は、第一の独白以後殆んど現われないし、また希望が満された時も、一言もそれに言及していない。キャシオウがイミリアと密通してゐるといふ疑いは、第一の独白に於てではなく、第二の独白で突然述べられている。要するに独白に現われているイアゴウは、彼の欲望を強く引きつける計画を実施するに当つて、欲望に対する抵抗を意識し、それで計画に色々理由をつけて無意識に抵抗を取り除こうとするのである。つまりコルリツジの所謂「動機探し」をしてるのであるが、実は「退屈凌ぎに」<sup>(14)</sup>困難な、危険な行動をとりたいといふ欲望、優越感を満たし、犠牲者が苦しむのを見て自分の知力を誇りたいといふ<sup>(15)</sup>気持が、多くの残忍な行為の無意識的な動機であるらしい。

イアゴウはリチャード三世以上の悪人である。リチャードはイアゴウよりはるかに偉大な人物であり嫌悪を感じさせることがよりすくない。「せむしのリチャード」とあだ名をつけられている彼の肉体的不具は、彼の自己本位に対して幾分言訳になつてゐるように思われる。イアゴウは冷淡で、打算的であるに対して、リチャードは強い情熱を持ち、良心の苛責も受ける。イアゴウは自己本位を正当化するために、善良な者に屈辱を与える機会を狙つたり、犠牲者を苦しめて喜んでゐるが、リチャードは彼程否定的でなく、自分の出世の邪魔になる者を選んでこれを滅ぼすが、王権を得ることが目的であつて、屈辱を与えることが目的ではなく、決して犠牲者を苦しめて喜ぶようなことはない。またイアゴウはミルトン



のサタン以上に悪魔的である。サタンは樂園でアダムとイブが共に居る処を見た時に、二人の幸福を破壊させようと考へては哀れに思ひ、犠牲者に対して憐愍の情を吐露し、泣くことも出来たのである。人間の没落を招来しながら、自分自身の没落に終る時でさえ、彼はイアゴウに較べて、いかに精神的破壊に遠いことだろう。オセロウとデズディモウナが航海のあとで始めて会ひ、嬉しさの余り夢中になつてゐるのをイアゴウは眺めて、

O! you are well tun'd now,

(おゝ！お前たちは今の処はうまく調子が合つてゐる。)

But I'll set down the pegs that make this music,

だが誓つて、絲を緩めて、

As honest as I am. (ll. i. 202-4)

(この音楽の調子を狂わせてやるぞ。)

とつぶやく。イアゴウの悪魔のような冷淡さや、相手の破壊を喜ぶ点では、メフィストフェレスに、彼の同輩として相應しいものが發見出来るのみである。

イアゴウは、シェイクスピアが悲劇的に世間を眺めていた時期に創造されたものである。「リア王」のエドモンドもこの型に入る。エドモンドも、イアゴウのように観客の前で皮肉な註釈を加えて、自分の非行を分析して見せる。この型は最後に「シムベリン」のイアキモウとなつて現われるが、イアゴウとイアキモウの間には重大な相違がある。この兩者を比較すると、悲劇時代の、いらいらして心の亂れているシェイクスピアと、最後のローマン劇時代の満ち足りた、樂觀的なシェイクスピアとの相違がよくうかがわれる。イアキモウは、<sup>(16)</sup>イアゴウ程意識的マキアベリ主義者ではない。彼は陰謀を行つてゐる最中に自分の非行を喜んだり、心中の悪魔的信念を言葉に表わしたりはしない。しかし彼は極悪非道な人間だと解釈しなければ彼の行動は理解出来ない。単にポステュマスとの賭に勝ちたいという望だけでは、ローマからブリテンまでわざわざ苦しい旅をしたり、ブリテンに来てからも向う見ずなことをやつたりする動機としては余りにも不十分だ。彼は悪魔の化身であるからこそまずイモゼンを誘惑し、それに失敗すると彼女とポステュマスをわなにかけて陥し入れようとする。その陰謀はちようどイアゴウがオセロウとデズディモウナを破壊させようとする陰謀と酷似している。彼は



イアゴウのように相手の純情と信頼を利用し、それを武器として相手の破滅を企てる。ただこの両者の根本的な相違は、イアゴウが代表し象徴している力は、純情より強力だつたことを証明し、イアキモウが代表し象徴している同じ力が、結局純情に負けたという点にある。オセロウを取り囲んでいる暗黒は希望の光によつて照されることがなかつたが、「シムベリン」の最後の場面では光が射し、悪はイモゼンの信念と幸福を破壊することが出来なかつたことを証明するのみならず、悪は遂にイアキモウの暗黒の心の中においても支配力を失つたのである。この悪魔は、イモゼンによつて「恋愛と邪淫の大きな相違」(Cymbeline: V. v. 195-6)を教えられたのである。

〔註〕

(1) テキストとしては The Works of Shakespeare. Edited by W. J. Craig. Oxford. 1924. と研究社英文学叢書「オセロウ」市河三喜註訳を用いた。引用文の行数は Oxford 版による。

(2) 「オセロウ」の原話はイタリアの Giraldi Cinthio 作 Hecatommithi (1565. 小話百篇) という伝奇集の第三卷・第七話であるが、イアゴウは単に「旗手」とだけで名前がない。オセロウは「ムーア」、デズディモウナは「ディズディモウナ」となっている。原話の旗手はイアゴウと比較すれば、この恐ろしい人物の前に投ぜられた影に過ぎない。

(3) シェイクスピアの場合には、独白は外面的な筋の運びについては勿論のこと、心の奥の秘密についても報道するのが常である。その上悪覚の独白は時には観客に提供された説明として解してよいのは、シェイクスピアに於ける技巧の不思議な点である。例えば「タイタス・アンドロニカス」(II. iii.) のアロン、「ヘンリー六世第三部」(III. ii, V. vi.) のリチャード、「リチャード三世」(I. i. 2回, I. ii.) のリチャード、「リア王」(I. ii. 2回, III. iii, v, V. i.) のエドワードらの独白。(Bradley: Shakespearean Tragedy. p. 222.)

(4) “honest Iago” 即ち公明正大な正しい信頼出来るイアゴウという意味で、仮面を被り、見かけは結構忠義面をして、間抜けのロタリーゴウ以外 (IV. ii. 185) の総ての者に高潔な人間と思われていた。オセロウには “wise” (IV. i. 75), “honest” (III. iii. 118) / デズディモウナには “an honest fellow” (III. iii. 5), “good” (IV. ii. 148) / キャシオウに於て “kind and honest” (III. i. 43) と思われていた。このことはチンティオの物語にはなく、シェイクスピアの創作である。



- (5) Bradley : op. cit., p. 218
- (6) Bradley : op. cit., pp. 221—2
- (7) Burne : Three Plays of Shakespeare, p. 44. より引用)であつて、シェイクスピアはイアゴウに対する以上にこの憐れな人物に無慈悲である。彼は金を奪われ、揚句の果ては犬のように撲殺される。
- (8) イアゴウはロダリーゴウを “snipe” (抜作) と呼んでいる。誰が抜作を憎むだろうか。しかしロダリーゴウは事情を知り尽くしている。彼は次第に腹を立てるようになり、デズディモウナに渡してくれといつてイアゴウに渡した金と寶石の返還を求める。それでイアゴウは彼を殺してしまう。
- (9) H. N. Hudson : Shakespeare : His Life, Art, and Characters. Vol. II. pp. 463—5.
- (10) II. iii. 12 ff.
- (11) Hazlitt : Characters of Shakespeare's Plays. p. 42.
- (12) Swinburne : op. cit., p. 29.
- (13) Hudson : op. cit., p. 471.
- (14) Hazlitt : op. cit., p. 42.
- (15) Bradley : op. cit., pp. 223—9.
- (16) イモゼンの夫ポステュマスとイモゼンの貞操をかけ、彼女の寢室に忍び込み、偽つて彼女を汚したかのごとく装い、賭の指輪を取る男。